
艦魂の歌 ??リバチー半島のかなた??

米問屋のひ孫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

艦魂の歌　??リバチー半島のかなた??

【Zコード】

Z2695K

【作者名】

米問屋のひ孫

【あらすじ】

第一次世界大戦、東部戦線ではソ連軍がドイツ軍と熾烈な戦闘を繰り広げていた。その初頭、連合国からの支援物資無しには戦線の維持が難しい状態へと陥ったソ連だが、最大の支援ルートであるイギリスとソ連を結ぶ北極海ルートはノルウェーを占領したドイツ軍によつて攻撃に晒されていた。

これはドイツ軍の攻撃から支援物資を運ぶ船団を護るべく戦つたソ連の駆逐艦グレミヤーシチイの艦魂とその航海士の物語である。

第一話・賽は投げられた（前書き）

割り込み投稿：2012/01/02

第一話：賽は投げられた

猛吹雪の中を船団が進んでいた。イギリスのロッホ・ゴーからア
イスランドのレイキヤビクを経由し、ソ連のムルマンスクへと向か
うP.O.13船団である。

数日前から続く吹雪や霧やら暴風やらで船団はばらけて一いつに
分かれ、独航する船も出でしまう有様であつたがそれでも遮一無二
ムルマンスクへと向かつていた。船団の積荷は戦車や航空機、機関
銃から缶詰、衣類まで多岐にわたる。

資本主義国、しかも君主制の国であるはずのイギリスが共産主義
国の親玉たるソ連に物資どころか兵器まで送る。どうしてこんなこ
とになつたのかといえば、一九四一年六月二十一日までさかのぼる。
その直前までは第二次大戦の戦渦が歐州を巻き込んでいる中を、
ソ連はかろうじて平和を保つていた。これまた共産主義とは相容れ
ないはずのファシズムを標榜するナチス・ドイツと手を組みポーラ
ンドを分割、ポーランド人相手に好き勝手弾圧してはいた。しかし、
フランスまで蹂躪したドイツとイギリスが戦争しているのを腹の中
ではいろいろ企みながら傍観するだけであつた。

しかし、その六月二十一日にナチス・ドイツはバルバロッサ作戦
を発動、突如として独ソ不可侵条約を破りソ連へ侵攻した。

ドイツ軍の攻撃を全く予期していなかつたソ連軍はスターリンが
行つた大肅正の影響などによる指揮系統の混乱や、軍上層部の戦争
遂行能力の欠如により各方面で次々に防衛線を破られた。また冬戦
争でソ連に奪われた領土の奪還を目指すフィンランドもドイツに呼
応してカレリア地方に侵攻した。

快進撃を続けるドイツ軍はわずか二ヶ月でソ連第二の工業都市か
つ旧首都でもあるレニングラードにまで到達、これを包囲した。そ
の後もウクライナ地方の古都キエフや第三の工業都市ハリコフが瞬

く間に占領され、ソ連の命運は尽きたかに見えた。が、ソ連はドイツに占領されるよりも先に工場をウラル山脈の東に疎開させることに成功した。そのおかげで一時的に生産能力が落ちるのは不可避ではあったものの、長期的に見れば持久戦に必要な生産能力の確保には成功したのである。

しかし質で圧倒するドイツ軍に対してもソ連軍は量で対抗する他は手では無いため、ソ連の持つ工業生産能力は戦車や戦闘機、銃のような兵器及び武器に重点的に割り振られ、民生品はともかく、トラックや機関車のような輸送用機械や冬には必需品のはずの軍用防寒着でさえ不足が目立っていた。

そこで対ドイツを旗印に手を組んだイギリス、アメリカを始めとする連合国はドイツ軍の矢面に立たされ悲鳴を上げているソ連の要請を受けて物資を送ることに決定、そこで編成されたのが一連のP.Q.船団である。

この船団はイギリスで物資を積み込むとアイスランドを経由して北海、バレンツ海を通り、ソ連領にある極北の港町ムルマンスクやアルハンゲリスクで積荷を降ろす。ソ連からは豊富な金属資源のお裾分けをしてもらつて帰る。帰り道の船団はP.Q.船団と呼ばれる。もちろんのことながらドイツもそんな邪魔者を見過ごしそうとは思わない。

ノルウェーに陣取つたドイツ軍はあらゆる手段でP.Q.船団およびQ.P.船団の妨害を行うこととなつた。

そして、このP.Q.1-3船団。途中まではキング・ジョージ五世級戦艦『キング・ジョージ五世』『デューク・オブ・ヨーク』、レナウン級巡洋戦艦『レナウン』、イラストリアス級空母『ヴィクトリアス』などを始めとした極めて強力な護衛艦隊が付いていたのだが、今は彼らも引き返してしまつた。残つたのはクラウン・コロニー級軽巡洋艦『トリー・ダード』とE級駆逐艦『エクリップス』、F級駆逐艦『ファーリー』だけ。それも悪いことに護衛すべき商船隊はどこ

にも見えない。はぐれてしまつたのだ。

そしてもつと問題のあることにノルウーのトロンハイムからビ

スマルク級戦艦『テイルピツツ』が出撃したとの報も入つていた。
『テイルピツツ』は約一年前に起きたデンマーク沖海戦でイギリス
の誇る巡洋戦艦『フッド』を一撃で返り討ちにし、先に極東で撃沈
されたキング・ジョージ五世級戦艦『プリンス・オブ・ウェールズ』
を撃破して撤退させた挙げ句、続くビスマルク追撃戦では戦艦一隻、
重巡洋艦一隻の敵艦隊と一時間半近くも砲撃戦を演じて北海に消え
た『ビスマルク』の姉妹艦である。

そんな怪物じみた性能を持つ戦艦が出撃したのに頼みとしていた
ロイヤル・ネイビーの戦艦や空母はいない。残つたのが先ほどの軽
巡洋艦一隻と老朽駆逐艦一隻。

商船の乗員は口々にこう言い合つた。

「こないな護衛付けてもうても、戦艦と出っくわしたら三十分もせ
えへんうちに海の底で仲良うおねんねやで」

「いや、十分もかからんよ。ま、あの世でもよろしく頼むぜ。この
船団の番号が十三の時点で覚悟はしたさ」

そして二十五日には最後の頼みの綱の護衛隊もはぐれてしまい、
商船隊は恐怖の海を急ぎ足で駆け抜けようとしていた。

一九四一年三月二十七日。

護衛隊は必死に商船を探していたが、一口に北海と言えどそれは
広い海である。そう簡単に目的のものを見つけられるわけではない。
電波を出して集合でもかけようものなら商船は集合するだろうが、
敵の爆撃機やシボート、戦艦まで集合してしまつ。護衛隊は互いに
相手を見失わない程度に散らばり、商船を必死でかき集めていた。

その時である、水平線に怪しい陰が現れた。黒い点が二つ。

黒い点はぐんぐん近づいてくる。レーダーには二隻の船が映つて
いる。

商船かと思ったが、速さが全然違う。並の駆逐艦よりもまだもう

少し速いように感じられた。敵の前衛を務める駆逐艦かもしけない。艦橋に緊張が走る。

実は思い当たることがある。今朝、商船隊を集めている最中にドイツ軍の奇妙な飛行艇が霧の中から現れ、船団の周りを数度かぐるぐる周るとまた帰つて行つたのだ。飛行艇から連絡を受けたドイツ艦艇艇なのかもしなかった。

スピーカーから警報が鳴り響き、艦内の廊下を乗員の足音が支配する。各自の備砲が怪船を睨み、『トリニダード』の連装砲塔はまく右に旋回、それから砲にうんと仰角をかけた。

乗員達が攻撃命令を今か今かと待つていたその時、怪船からちかちかと光が発せられた。

「や、イワンだ！」

誰かが叫ぶと共に、信号兵が発信された艦名を伝える。

「ソ連海軍の駆逐艦『グレミヤーシチイ』と駆逐艦『ソクルシーテリヌイ』だそうです」

ともあれ戦闘準備は解除され、非番の水兵はやつてきた味方を迎えようと喜び勇んで甲板に出る。

しばらく後、ソ連の駆逐艦二隻が護衛隊に加わった。各艦歓迎するが、ソ連の駆逐艦の甲板には人がほとんど見あたらない。何人かが艦橋近くで帽子を振っているが、それが以外はひつそりと静まりかえつている。

「なんだいありやあ、幽霊船みたいだな」

「うむ。せつから来てやつたのにはあまで愛想がないとは思わんかつたよ」

『トリニダード』の艦橋でもぶつくさと文句がこぼれている。

ソ連から派遣されている連絡将校は気まずそうに艦長へ囁いた。彼ももとは眼前を走るあの駆逐艦に乗つっていたことがあるのだ。適当に理由をつけて戦友たちを庇おうと企図した。

「あんまり外に出ではならんというお達しが来てるんですよ。こつちの海は荒いでしょう。たまに海に転げ落ちる馬鹿な水兵が出ます

んでね

「ふーむ、それなら外に出て欲しくないな」

艦長はにやりと笑つた。

三月二十八日。

PO-13船団に所属しているパナマ船籍の商船『レイスランド』はノルウェーの北岬^{ノール・カッブ}から百十マイルほど北東を航行していた。ノルウェー人の船長、スヴェレ・ブレッケは船橋に立つてシケた煙草を口にくわえ、前の海を眺めていた。

ブレッケは五十三歳、ノルウェー人で頑丈な男である。船員一筋で人生の駒を進め、サウザン・アトランティック・ラインの運行する四千トン級の貨物船『レイスランド』の船長となつたが、船もろとも徴用されて今に至る。

?『レイスランド』は一九一〇年にイギリスのグラスゴーで建造された四千トン級の商船で、ソ連向けに戦車や航空機、トラックから防寒着や食料まで、いろいろな物資を積みこんでいた。こうすればたとえ目的地にたどり着けない船が出ても、ある一品だけがまつたく届かなかつたなどという事態は生じない。そしてこれは予定だが、帰り道は代金としてソ連から金塊やらを頂いて帰るのである。

この船はバレンツ海の荒れようには全くの無力であった。舳先がうんと持ち上がつたと思うと、今度は波の谷間へまっしげらに落ち込み、ついでに前転でもするかのように船尾が持ち上がる。

船長の口から煙草が落ちた。

煙草の断面には歯形がついている。あまりの揺れに持ちこたえようとして、煙草を噛み切つてしまつたのだ。ブレッケは惜しそうに煙草の切れつ端を見つめ、それをつまむと灰皿に放り込んだ。

「やれやれ……ムルマンで煙草は買えるんかねえ……」

暴風が吹きすさび、海面は沸き立つ。ブレッケのつぶやきは自然の猛威にかき消された。大波が『レイスランド』に叩き付けられ、

やはり船『ご』と徴用された船員のゲオルグ・ゴッドフレッドセンは悪態をつきながら、双眼鏡を握つたままでもんどうりうつて転げた。

「ゲオルグさん、交代です」

ゴッドフレッドセンは頭を搔きながら立ち上がり、いつのまにやら後ろに立つていた同僚のアスピヨルン・オラフセンと交代した。オラフセンはまだ二十三歳、船『ご』と徴用された船員の中では最も若手だった。

「しっかりやつてくれや、アスピヨルンさんよお」

「大丈夫ですかねえ……？」

ブレッケはオラフセンの肩を叩いた。

「いつも通りで大丈夫だ。緊張すんなよ？」

「わ、分かってますよ船長」

「なあに、『テイルピッツ』が来たら白旗あげて、荷物差し出したらいいさ」

ブレッケは冗談めかして言つと、引き攣つたように笑つた。

しかし、この時既に護衛なき商船は悪夢の始まりへと踏み出していた。

前日の朝、B V 138飛行艇が船団を発見したわけだが、B V 138から船団発見の報を受けたドイツ軍の司令部では潜水艦『U-435』『U-436』『U-454』『U-456』『U-585』『U-588』を出撃させ、駆逐艦『Z 24』『Z 25』『Z 26』からなる第八駆逐艦隊に出動準備を整えるよう下命した。JU 88やHe 111といった爆撃機がノルウェー北部から飛び立ち、爆弾を満載して獲物はいなかと飛び回っていた。

ドイツ軍のJU 88中型爆撃機の編隊が吹雪の中を飛んでいた。燃料はまだまだたくさんある。隊長機の機長は燃料計を見てうなづいた。

その時だった。突然吹雪が止み、視界が開けた。

「機長、船影が見えます！」

「よし、確認しろ。うむ……まあ気をつけろ」

「了解！」

確かに船が前方にいる。

オラフセンは双眼鏡で海面を舐め回すように見ていた。ブレッケもやはり双眼鏡を両手に、煙草を口にして心配そうに見回している。水平線を見ようとしても霧や雪、波の飛沫で見えない。狭い視界の中では見える海面には他の商船や味方の艦艇は見えない。陸地も見えず、もちろんのことながら敵の戦艦や巡洋艦も見えない。

「潜望鏡一つ出てきませんね」

「バカヤロ、出てきてたまるか。縁起でもない」

ブレッケは不機嫌に怒鳴つた。

そのとたん。

急に風が治まり、霧も晴れ始めた。ただ、波は荒い。

「や

ブレッケは呟いた。

オラフセンは双眼鏡を放り出して逃げた。

「取り舵いっぱい！」

ブレッケは喚く。操舵手が舵輪を力一杯に回す。

重い低音を響かせて『ロ88』が真上、それも船橋すれすれを飛び去る。偶然船橋にやつてきた船艤員サミニュエル・ヒックマンは「ひやあ！ クラウツや！」と悲鳴一声、逃げ出した

『ロ88』の編隊は『レイスランド』を敵の輸送船と確認したらしく、空中でゅつたりと旋回すると超低空を這つように飛んできた。自衛手段を全く持っていない『レイスランド』のほんの三十メートルほど上をフライパスするや否や、数発の爆弾をばらまいた。ブレッケは操舵手に向かつて何事かを叫んだが、巨大な水柱のあがる音、そして爆音にかき消された。

一発は甲板に大穴を穿つて積み荷の戦車を何台か吹っ飛ばし、も

う一発が舷側を破つた。

ブレッケは慌てて伝声管に駆け寄つた。が、その視線は悠々と飛ぶジョ88に注がれている。

「オラフ！ 大工のオラフ・テール！ 至急損傷箇所へ向かえ！」

しかし、呼ばずとも状況は既に最悪の方向へと突き進んでいた。

『レイスランド』は徐々に傾きだし、煙突から吐き出される煙は弱々しくなつていった。機関室にまで浸水してきたので機関員達は這々（ぼうぼう）の体で、さつそく救命胴衣を着て甲板へとあがつてきた。ジョ88はひどく満足げに もちろん飛行機から感情などは伺えないが、ブレッケにはそう見えた 飛び去つて行った。

水浸しがつ血まみれになつて船橋に上がつてきた大工のテールも首を横に振つた。

「あんなもんの修理は無理でさね、船長。早く逃げねと船と一緒にお陀仏でさあ！」

もはや『レイスランド』は航行不能である。ブレッケは四十五人の乗員全員を集めると船体の放棄を宣言し、救命ボートをおろすよう命じた。

積荷の燃える臭いの中、乗組員達は必死に救命ボートの用意をする。船の傾斜のおかげで邪魔になつていた戦車を海に突き落とせた。そして、どうにかこうにか救命ボートをおろす。怪我人が数名いたが、幸い誰も死んではない。何隻かの救命ボートに分乗して、全員が傾いている『レイスランド』を脱出した。

ブレッケも最後に救命ボートに乗つたが、とんでもない事に気付いて喚いた。

「おい！ 誰か積荷の缶詰取つてこいー ボートの上で餓死しちまうぞ！」

どのボートも『レイスランド』から離れよつとしていたが、そのオールの動きがはたと止まる。皆もと来た方向に急いで戻る。『レイスランド』はまだ傾きながら浮いている。何人かが『レイスラン

ド』に飛び乗つて、船艙から次々に缶詰の詰まつた箱を持ち出した。めでたく食料や水の確保も出来たところでまたオールを漕いで離れようとした。ブレッケはボートの上に立ち尽くし『レイスランド』を潤んだ目で見つめていた。

その後、嵐が襲つた。救命ボートは離ればなれになり、あるボートの乗員達は近くを通りがかつたHボートに収容された。

また別のボートはノルウェーに辿り着き、街で徘徊しているところをやはりドイツ軍に収容された。

合計十六名。四名が亡くなつたが、ノルウェー人やデンマーク人が多かつたため、彼らはヴィルヘルムスハーフェンなどにある収容所などを経由して後にドイツ軍占領地内にある家に返された。ゲオルグ・ゴッドフレッドセンもその幸運な一人である。もちろん、アメリカ人やイギリス人などドイツの敵国籍を持つ船員は抑留された。しかしブレッケ船長や船員のアスビヨルン・オラフセン、大工のオラフ・デールら一十九名は極寒の、そして鉛色のバレンツ海に消えた。

一九四一年三月二十九日。

ソ連の駆逐艦二隻と合流したPQ13船団はムルマンスクへ向かって航行していた。

この時点ではぐれて独航していた貨物船の『レイスランド』『エンパイア・レンジャー』が爆撃機に撃沈されている。

またこの日の未明にはドイツ軍の駆逐艦『Z24』『Z25』『Z26』から成る第八駆逐艦隊は貨物船『バトウ』と出くわし、これを見撃沈していた。

しかし、船団側にもちょっとした光明はある。イギリス軍がムルマンスクに送り込んでいた八百トン級の掃海艇四隻が加勢に駆けつけ、はぐれた商船や撃沈された船の乗員の捜索に乗り出していた。

朝九時。

船団の前方からまたもや怪しい陰が現れる。

先導していたソ連の駆逐艦『グレニヤーシチイ』『ソクルシーテリヌイ』を軽巡洋艦『トリニダード』と駆逐艦『エクリップス』が追い抜く。

今度こそドイツの駆逐艦であった。

が、いざ戦おうとすると、猛吹雪が到来した。たちまち視界から駆逐艦が消える。『グレニヤーシチイ』は商船隊のところへ戻つて煙幕を展開し始めたが、とんだ無駄足と言つても良い状態になつてしまつた。

猛吹雪の中からヌツと現れた敵に『トリニダード』の主砲が火を噴く。『エクリップス』も『トリニダード』の援護に回るが、ドイツの駆逐艦隊も激しく応射してたちまち水柱に囲まれる。

反航戦なのですが敵味方が入れ違い、またもや英軍は吹雪の中に敵を見失う。

艦長は仕方なく、「打ち方止め」を命令した。

鳴り響いていた砲声は雪の中へと消える。触先が波を切り、煙突からはいつも通り煙が上がる。駆逐艦隊が消えた方向を乗員達は不安そうな顔で見つめていた。

またもや、今度は逆方向に駆逐艦隊が現れる。『トリニダード』の主砲塔が回転する。

艦長は叫ぶ。

「打ち方始め！」

駆逐艦隊の周りに水柱が立ち、先頭を走つていた駆逐艦から火の手が上がる。状況は護衛隊に味方した。火の手で識別しやすくなつた敵に砲撃を集中させたが、それが代将旗を掲げる『Z26』であった。

火の手を上げる『Z26』は『トリニダード』に集中攻撃された。航行能力を失い、いまや霧の中を漂うのみ。そして満を持して

て『トリニダード』は『Z26』へ向けて魚雷を放つ。

一方、駆逐艦『エクリップス』は残る一隻を追つて霧の中を彷徨う。そして霧を衝いて聞こえてきた爆音の方角へ向かうと『トリニダード』が火災を起こして傾きつつある。そしてその前には『Z26』がやはり火災を起こして漂つている。『Z26』の最期の悪あがきが『トリニダード』に痛手を負わせたに違ひなかつた。『エクリップス』はもはや風前の灯火であつた『Z26』にとどめを刺して葬つた。

一方蚊帳の外に置かれたソ連の駆逐艦『グレミヤーシチイ』でも困惑が広がつていた。砲声はすれど、敵も味方も見えない。僚艦の『ソクルシーテリヌイ』も吹雪の中に消えてしまい、姿はない。艦長のアントン・ヨシフォヴィチ・グーリン中佐も首を傾げていた。

「こりゃあ全く見えんな」

そう呟いたその時、見慣れない駆逐艦が前を横切つた。突然のことに、どちらも反応できない。グーリン中佐は咄嗟に「撃て！」と叫んだものの、放たれた砲弾はむなしく吹雪の中へと消えた。当たつたのか外れたのかすらも分からぬ。

砲声が轟き、霧を引き裂くような炸裂音が聞こえるがどうしようもない。防盾があるだけで、あとは吹きさらしの備砲に乗員たちはかじりつき、前方を睨む。雪はヘルメットの上にも容赦なく降り積もり、制服の袖は波の飛沫で凍り付いている。

吹雪が止んだ頃には既に決着は付いていた。『Z26』は沈み、僚艦の『Z24』と『Z25』は戦闘海域からしつぽを巻いて逃げ出した。が、軽巡洋艦『トリニダード』が魚雷を食らつて大破していた。

しかし、もう目的地ムルマンスクへは近かつた。爆撃機をどうにか撃退し、リポートに爆雷を浴びせて一隻を撃破、翌日までには船団のほとんどが目的地へ到着した。が、独航していた商船の『イン

『デュナ』と『エッフインガム』は互いに助け合いつつ流氷の海を越えようとしたが、ジボートに発見されてそれを果たせずに消えた。

そして、ムルマンスクももはや安全ではないことが、月もあけた四月から早速船団の乗組員たちに思い知られることとなる。

第一話・賽は投げられた（後書き）

資料をかき集めていたら『レイスランド』の乗員の詳しい話を見つけたので書きました。調べてたらブレッケ船長が「ペールギュント」的で私には泣きました。

この人にもソルヴェイグみたいな存在がいたのだろうかとか考えると……。

第一話・極夜は去つゆき（前書き）

最終更新：2010/08/27

第一話・極夜は去りゆき

朝を迎えた軍港の上空をどんよりとした暗い空を低く垂れ込めた雨雲が覆っている。ぼしゃぼしゃと大粒の、凍りつくように冷たいみぞれが地面を打つ。

ここは世界最北の不凍港、ムルマンスク。北極圏内最大の都市でもある。

モスクワよりもさらに一千キロ近く北にあるこの都市だが北の海を流れる暖流の北大西洋海流の影響で海は凍らない。つまりそれほど寒くは無いのだが、それでも四月初めの今でさえ最高気温は十度前後で、最低気温はマイナス十度後半に達する。

ソ連北方艦隊所属の駆逐艦『グレミヤーシチイ』はその身を桟橋に横付けして休めていた。

この駆逐艦は七号計画型駆逐艦、またはグネフヌイ級駆逐艦として知られる艦級の一番艦である。同時期に就役した他国の駆逐艦に比べて大型で、設計にはイタリアの影響が強い。

その『グレミヤーシチイ』の士官室で同僚達との打ち合わせを終えて一人海図やコンパスの片付けをしていた航海士のミハイル・ロマンoviチ・ウリリフ中尉は珍しく艦魂が見える人物であった。

彼と艦魂と呼ばれるものの付き合いは海軍軍人となつてすぐに始まつた。彼はバルト海艦隊の工作艦『セルプ・イ・モロト』で初めて艦魂と言う者を見たのである。時に、彼は少尉候補生であつた。

その艦魂はイギリス生まれで、経歴も運送船から通報艦、仮装巡洋艦、病院船と多岐にわたる変わり者だつた。「私、一度死んだことがあるのだけど」が口癖だつたが日露戦争時にポルト・アルトウール（旅順）の太平洋艦隊に所属していた大型艦船の中で唯一の生

き残りのことであった。病院船だったが赤十字社の手違いから日本にはそのことが知られなかつた為に砲撃を浴びせられて擱坐し、日本に引き上げられて一時は通報艦としてその海軍に所属していた。後にロシアに返還されたが干渉戦争中に再び日本に鹵獲された経験もあるとのことであった。

イギリス人らしく、またその豊富すぎる経験に裏打ちされた辛辣なブラックジョークを吐く艦魂だったが一年前に北方艦隊に転属になつた際に別れを告げた。風の便りに聞いた所によると『セルプ・イ・モロト』は去年のリガ湾からの脱出作戦の最中にドイツ軍に撃沈されたとのことである。

その今は亡きセルプ・イ・モロト曰く「艦魂が見える人間は一般的に水兵に比してある程度は暇な時間を持つ士官階級に多い。そしてその中でも『迷信深い』者は艦魂を見やすい」などと解説していた。

なるほど、艦魂は各艦に一人ずつ存在し全員の姿が女性である。軍艦に宿る精霊みたいなもので進水の際に誕生し、その艦が沈んだり解体された時に死ぬとのことだ。

しかし彼女達を見る事ができる者は少ない。その理由を彼女に聞くと先ほどの答えが帰つて来た。ニヤニヤ笑いを浮かべながらだつたのでたぶん理由は別なのだろうが、今となつてはそれを言つた本人が海底で永遠の眠りについてしまつてゐるので真意を知る由はない。

ウリリフが考え込んでいると後ろから声がかけられた。

「賢いソ連人の撃。それは考へるべからず。考へたなら、しゃべるべからず」

灰色のウシャンカ（耳当てのついたロシアの毛皮製の帽子）を被り、びしょ濡れの黒い外套を着た長身の女が立つていた。焦げ茶色の髪の下から覗く白い肌と茶色の瞳、そして右目を覆う黒い眼帯が

目につけ。開戦初頭の爆撃で一五〇キロ爆弾を食らった時に右目を失つたのである。艦魂と言つものは分身が修理されればたいがいの傷は治るらしいが、どうもこれだけは運悪く治らなかつたらしい。

「なんだグリー・チャか。驚かすなよ」

「私は念のために警告しただけだ。気を付ける。政治将校に余計な疑惑を与えるな」

そう言つとグリー・チャことグレミヤーシチイは脱いだびしょぬれの外套を「艦魂の力」とやらで消し去つた。外套を包んだ光がぱつとはじけるとそこには何も無くなつてゐるのだ。濡れた服を乾かすのに苦労しているウリリフには羨ましい限りである。

「だが、肅清なんて昔の話だぞ」

小声でささやくウリリフだが、グリー・チャは薄いある種の酷薄な笑みを浮かべると呟いた。

「甘いな、ミーシャ（ミハイルの愛称）。あの『グルジアの髭親父』がロシアの大地に君臨する限り恐怖は終わらない」

ウリリフは苦労性である。彼女がスター・リンのことを『グルジアの髭親父』だの『チフリスの田舎者』と言つたびに辺りを見回さずにはいられない。市井の人々はともかくとして、軍の人間は大多数が内心ではスター・リンのことを嫌つてゐるが下手なことを言って政治将校^{サール}にでも聞かれたらことである。

ちなみに彼女にかれればスター・リンの右腕として恐れられるNKVD（ソ連の秘密警察）長官のベリヤも『グルジアの気持ち悪い眼鏡』である。心配性のウリリフには刺激が強すぎる。それでも彼女は「奴らには私の言葉は聞こえないし、いくらNKVDでも『この駆逐艦はファシストの手先だから撃沈処分』なんて言つわけない」とお構いなしであった。

確かにそう言わればそうだし、爆撃機を叩き落としたり潜水艦に爆雷を浴びせたりと逆に表彰でもされそうなほどの戦いつぶりを見せる『グレミヤーシチイ』だが、それでもウリリフには心臓が止まりそうなほどのショックを与えるのだ。

ウリリフが丸めた海図を脇に抱えて自室に歩き出すとグリー・チャもついてきた。ウリリフは口をつぐみ、グリー・チャも何も言わない。途中で明日の天気について大論争をしている飲んだくれた三人組の水兵とすれ違い、敬礼を交わしたが人の気配はそれつきりである。自室につくと急いで扉を閉め、ウリリフはほつと溜め息をついた。

ソ連は艦魂が見える人間にとつてはつらい国である。艦魂が見えない人間からは艦魂と話している人間は独り言を言つてゐるようを見えるのだがそれがよくない。襟元に仕込んだ隠しマイクで敵に情報をおえようとしていると言われたらおしまいである。そうなればマイクが見つからなくともその人間は『ファシストの手先』やら『ソ連の破壊を企む民族主義者』やらとの罪状を着せられて収容所で十五年近い労働をしなければならなくなる。その上、もし労働教化刑十五年の刑に処されたとしても十五年で帰ることができるは極めて幸運である。こんなアnekドートがそのことを顕著に示している。

ゴリコフは労働教化刑十五年を宣告され、二十年間服役し、幸運にも刑期を残して釈放された。

被つていたウシャンカを「力」で消したグリー・チャはスチームヒータの前に陣取つた。舷窓のガラスをみぞれが音を立てて叩く。煙るみぞれの向こうにイギリスの軽巡洋艦『トリー・ダード』が大きなシルエットを浮かび上がらせて停泊していた。

軽巡洋艦『トリー・ダード』はP.Q.1-3船団の護衛としてイギリスからアイスランドのレイキヤビクを経由してマルマンスクにやつて来たのだがいつもごとく途中でドイツ軍に発見された。そして三月二十九日に船団の前方を航行中に接近してきた三隻のドイツ海軍

の駆逐艦と交戦、一隻を撃沈していた。それだけなら良かったのだが、こともあろうに自艦の発射した魚雷を食らって船腹に巨大な穴を空けられていた。寒さで故障した魚雷がブーメランの「」とく奇麗な円を描いて戻ってきたのである。

この時『グレミヤーシチイ』はPQ-13船団の後衛として船団の保護にあたっていたが直接砲撃戦には参加しなかった。が、ムルマンスクからレイキヤビクを経由してイギリスへ行くQP-9船団の護衛中の三月二十一日に嵐に巻き込まれ、古傷のせいで上部構造物に深刻なひび割れを生じていたにも関わらず二十四日には修理もしないまま船団の保護にあたっていた。それだけでなく幾度となくノルウェーのトロムソやスタヴァンゲルにあるドイツ軍の空軍基地から幾度となく飛来する爆撃機や雷撃機、哨戒機を相手に対空射撃を実施して戦果を挙げていた。三月三十日には輸送船『エッフィンガム』と『インデュナ』が潜水艦に撃沈されているがその際に一隻の潜水艦らしき物（U-585だったとも言われている）に爆雷攻撃を行つて撃破している。

つまりこの船団の護衛がソ連北方艦隊の任務である。ムルマンスクやアルハンゲリスクは英米からの船団によつて運ばれる支援物資の最大の陸揚げ港となつており、戦車や戦闘機からトラック、機関車、はてはタイヤ、防寒着までおよそソ連の必要としている物のほとんどなどがこの港から供給されているのであつた。

しかし『グレミヤーシチイ』の奮戦にも関わらず??当然と言えば当然だが??船団の被害は多く、陸上でも戦線は膠着気味とは言えどドイツ軍はまだまだ優勢を保つていた。

第一話・極夜は去りゆき（後書き）

？？解説？？

グレミヤーシチイ

艦級：7号計画型駆逐艦？／？グネフヌイ級駆逐艦

排水量：1,885t

全長：112.8m

全幅：10.2m

速力：38.6ノット

武装

B - 13? 130mm砲？×? 4

M 1938? 76mm高射砲？×? 2

21 - K? 45mm高射砲？×? 2

D ShK 38? 12.7mm重機関銃？×? 2

533mm3連装魚雷発射管？×? 2

爆雷投射機？×? 1? +? 爆雷？×? 25、またはKB-3型
機雷？×? 60、1926年式機雷？×? 65、1912年式機雷

? ×? 95のどれか

航続距離：19ノットで2,500海里

*解説

1936年7月23日、レニングラードのA・A・ジダーノフ記念第190号工廠にて進水。第二次世界大戦中に参加したソ連艦の中でも殊勲艦と称される軍艦の一隻。この頃には既に優先対象となりイギリス製の291型対空レーダーを装備していたらしい。

目立った戦果としては42年3月30日に独軍VIIIC型潜水艦のU-585を撃沈したとの説もある。

この7号計画型駆逐艦は第二次五力年計画の下で海軍の再建を目的に計画された艦隊駆逐艦でイタリアの支援を受けて建造された。36隻が建造される予定だったが、航洋性能の低さや構造的欠陥な

どから30隻に留まり、改良型の70号計画型駆逐艦が開発された。ただし70号計画型はロシア帝国海軍時代からの伝統に違わず、例のごとく改良の方向を間違えたため改悪型と称される。

航洋性能が低いにも関わらず荒れる北海を活動の場としたため、苦労は絶えなかつた模様。

ちなみに太平洋艦隊に所属していた姉妹艦のうち4隻は鞍山級駆逐艦として中華人民共和国に供与され80年代末まで就役、現在は全艦が記念艦として余生を送つている。もしかすると丹陽として中華民国で活躍していた雪風とも交戦したかもしぬ。

* 艦魂

相当あつさりした性格の持ち主。冷静沈着な態度も相まって「冷たい奴」とも思われがち。しかもヘビースモーカーで、さらに黒い眼帯まで装備したせいで姉妹達にさえ怖がられている。任務中はP D - 38 短機関銃を抱えているがその時周りにはウリリフしか寄り付かない。

ただし実は寂しがり屋。しかし戦争中なので余計な私情は任務の邪魔と考えて我慢している。そのせいで船団の艦魂達には「ムルマンスクの冰女」という二つ名を奉られている。

好物はボルシチ、コトレーク（カツレツ）。ただしコトレークは一度しか食べたことが無い。この頃は見ることも無いので泣きたいらしい。ちなみに姉妹達はイギリスやアメリカの艦魂達と仲良くして美味しい物にありついているとか。

愛称はグリーチャ。

セルフ・イ・モロト

* 解説

もとはロシア帝国義勇艦隊の運送船『モスクワ』。1898年8月にイギリス、クライドバンクのジョン・ブラウン社で進水。

日露戦争では旅順の太平洋艦隊に仮装巡洋艦『アンガラ』として所属していたが活躍の場が無かつたため早々に武装解除して病院船となつた。が、赤十字社が日本への通告を忘れていたため港内砲撃の対象となり擱坐。

このあたりのアンガラについてはレンガート少尉やまたは一時的にアンガラの艦長をつとめたセミヨーノフ中佐の著書に詳しい。

戦後に引き揚げられ通報艦『姉川』として大日本帝国海軍に所属したが、ロシアからの抗議などによりウラジオストクで返還。その後は不明だが、ロシア革命に対する干渉で出兵した際に機関の損傷で行動不能となつていた本艦がウラジオで確認されている。

後に『セルプ・イ・モロト（鎌と槌）』に改名され工作艦に改修された。

独ソ戦勃発の後に占領寸前のレーヴェリから脱出しようとしたが撃沈されてその波瀾万丈な生涯を終えた。

ミハイル・ロマノヴィチ・ウリリフ

大ノヴゴロドで1917年12月28日に誕生。つまり生まれつきのソ連人。

身長は170cm近くで、がつしりした男だが、生まれつき気が小さい。肅清の恐怖でさらに気が小さくなつた。独ソ戦勃発により辛うじて切り抜けることが出来たが、それでもビクビクしている。

さらに災難なことにグレミヤーシチイの過激な発言のせいでいつもおびえて暮らしている。母は大ノヴゴロドがドイツ軍に占領されて行方不明、陸軍大尉だった兄は大テロルの時期に「蒸発」と家族関係も災難続き。

あんまりぱつとしない紹介だが航海士としては優秀。

グレミヤーシチイとウリリフは仲が良いがグレミヤーシチイによると「私が付いていないとウリリフは寂しそうだ。決して私が寂しいからでは無い」とのこと。これは良いツンデレ、うわなにする

やめ

？？後書き？？

日露戦争に従軍したグロジャーシチイ級航洋砲艦グレミヤーシチイの資料を注文したつもりでうつかり7号計画型駆逐艦グレミヤーシチイの資料を買っちゃったw

と言うわけでこの作品は始まりました。『バルチック艦隊』の方は資料が引っ越し段ボールの中なので誠に勝手ながら4月初め頃までお休みです。申し訳ございません。

第三話・明るい空、黒い影（前書き）

題名がリバチー岬からリバチー半島に変わっていますが、私がコラ半島北端を「リバチー半島」を「リバチー岬」だと勘違いしているだけです。申し訳ありません。

次の日の夜。寒気が戻つて来たが空模様はと言つてこの時期には珍しく晴れていた。北極圏の四月は夜も薄明るく、雲一つないのに星の光は遠慮がちに薄れている。

久しぶりにソ連海軍の四艦隊の一、北方艦隊の主要全艦艇がムルマンスクに勢揃いしているのだが、それでもジボートの目に錯角を与えるための幾何学模様の迷彩が施された七号計画型駆逐艦五隻に六百トン級のウーラガン級警備艇や四百トン級のブリリアント級警備艇、潜水艦が数隻と言つた按配なのでどうも迫力に欠ける。本来なら「お密さん」であるはずの、船団護衛任務をひとまず終えて憩つているイギリス海軍の艦艇の方が港の主であるはずの北方艦隊より存在感を示していた。

実際のところはロシア帝国時代も含めれば四艦隊の内で最も古いのがこの北方艦隊であるが、なにせ帝国が黒海及びバルト海に進出するに至つてこの艦隊は一度消滅している上、アルハンゲリスクに替わつて主要な母港となつたムルマンスク自体が帝政末期に調査が開始された新しい都市である。未開の地に軍港都市を建設したわけで、三十年やそこらでインフラが整うわけもなく大規模な艦隊をここに配備することも出来ず今に至つていた。

ムルマンスクの街並みもあちこちの建物に焼け焦げが目立ち、瓦礫と化しているのも少なくは無い。人通りも少ないためかその景色は寂寥感を漂わせているが、それ以上に殺伐とした雰囲気を振りまいていた。

橋頭には簡素なレーダーアンテナ、艦首に赤い星や共産主義の象徴たる鎌と槌の図案をあしらつた旗を掲げるみすぼらしい駆逐艦『

グレミヤーシチイ』も桟橋に横付けされていた。幾何学模様の迷彩は保たれているがそこかしこに錆びが浮いている。舷側にはペンキや刷毛を持つた男達がしがみついて久しぶりの化粧直しをしていた。実のところはいつ嵐に巻き込まれて海の藻屑になつてもおかしくないほど傷んでいるのだがソ連にはそんな修理をする余裕が無いので化粧直しで我慢である。

眼帯を押さえ残された左目を細めながら舷窓から空を見上げてグリーチヤは誰ともなく呟いた。舷窓のガラスには気泡やらヒビやらが入っている。

「今日は絶好の爆撃日和だ」

「嫌なこと言うよなあ、グリーチヤは」
ウリリフが文句を言つと彼女は振り返つた。

この潮の匂いと湿氣に満ちた部屋がウリリフの部屋である。歪んだ鉄の床には海水がうつすらとたまっていた。舷窓の位置が低い上に水密が失われているのでちょっとした波でも水がなだれこんでくる。航行中などは大騒ぎであたり一面が海水の奔流に襲われる。

前にいる艦魂ご本人には悪いのだが、酷使されたせいでガタが来ておりいつ海の藻屑になつてもおかしくない駆逐艦に乗り、やたらと荒波に揺さぶられ、海中からはUボートに狙われ、頭上からは爆撃機に襲われる艦隊勤務など彼にとつては御免だつた。いくら昔風に言つ「軍艦家族」と共に戦つては御免だつた。最近になつて前からいた第二親衛戦闘連隊に加えて、最新鋭の長距離護衛が可能なPe-3重戦闘機を始めとしてLaGG-3やYak-1、P-39といった戦闘機を多數装備した第九五戦闘連隊が北方艦隊に直援として配備されることになり、爆撃機については一安心かと思つたがいざ实物を見ると驚きの肩すかしも良い部隊であるというのも判明していた。その部隊はもともと第一〇三爆撃連隊で、装備している

戦闘機はほんの数機、特に期待のPe-3など一機しか配備されていない。しかも主要な装備は**襲撃機**^{ショトルモカイク}のIl-2なのでいつも対地攻撃に駆り出され護衛に来てくれたことなど一度もない。一度などはJu88爆撃機に襲われている最中に無電で呼び出すと「戦闘機の航続距離が足りないのでそこまで行けない。Pe-3も整備中だ。幸運を祈る」と言われる始末。そんなわけで頼りになる直撃は腕は確かだが装備が航続距離が短いYak-1やP-39なのであまり遠くにはやつてきてくれない第一親衛戦闘連隊しかいなかつた。ゆえに憂鬱な艦隊勤務が続いている。

ただ肩すかしなのはいつものことで「数百もの機甲部隊や航空隊、世界最大規模の潜水艦隊を保有するソ連軍はいついかなる敵に侵略されても数日のうちに戦場を敵の領土に移すことができる」などとラジオでは宣伝されていたのに、今や首都モスクワが風前の灯なのもそんな逸話の内の一つであった。

「こう言つておけば、敵が来ても覚悟は出来ているだらう？ それには来なければそれはそれで運が良いということだ」「

「……もう少し空氣を読んでくれ、頼むから」

人の心も知らずいささかも表情を変えず言つてのけた相方を彼は恨めしそうに睨んだ。彼女はついと視線をそらすと首の切り傷を指でそろそろと撫でた。傷の奥に鮮やかな赤い血が滲んでいる様が生々しい。

「今日の空襲は『トリー・ダード』が標的になるだらう

またもや空氣を読まず、天氣を予測しているかのような何気無い口調で物騒なことを言つので彼は露骨に嫌な顔をした。それに気づかず小難しい表情で顎に手を当てて考え込む彼女だったが、彼女の予想がマルマンスクにいる艦魂達にとつては重要である。ソ連海軍以上の規模であればだいたいどこでもそうだが、駆逐艦の艦魂は水兵かせいぜい下士官である。が、彼女はここでは司令官だった。

彼女の分身たる『グレミヤーシチイ』は単なる駆逐艦だが、戦艦や巡洋艦どころか嚮導駆逐艦さえも配備されていないソ連北方艦隊にあつては姉妹艦の『ソクルシーテリヌイ』『グローズヌイ』『グロムキー』『ゴルダイ』と共に現状では最大最強の艦艇として君臨している。その中でも最も活躍し、特に対空レーダーを装備している『グレミヤーシチイ』が旗艦のような扱いを受けているため艦魂達もその艦魂を司令官として扱っていた。ただ、もともと目つきが吊り目がちでおつかない顔つきな上に眼帯をつけたため如何にも戦馴れた司令官の如き風貌になってしまったからという理由もあつたのも確かである。そんなこんなで彼女は黒いジャケットや白地に青い横縞の入つた水兵の伝統的なシャツを脱ぎ捨て、ソ連海軍の特徴である肩章の無い立襟の上着を着ることとなつたのだ。

「……本日は猛烈な空襲が予想されるが、各員がその義務を全うしこれを撃退せんことを期待する。うむ、これは名文句だ」

もうすぐ始まる打合せを締括る言葉を考え終わり、頬を少し緩めて一人悦に入る彼女にウリリフはツツコんだ。

「それってネルソン提督のパクリだろ」

「くつ……」

ネタ元を見破られて（有名な文句の改変なので見破るも何も無いのだが）珍しく動搖した様子を見せる彼女の肩をぽんぽんと叩くと彼は仕事をしに、すたすたと艦橋へ行つた。

彼女はというと彼が去つて行つた廊下をじつと見てからウシャンカをぐいと被ると光を放つて転移した。

ウリリフが廊下の角を曲がるとぺたぺたと壁に貼られたプロパガンダポスターが彼の目に入つた。バンダナを頭に巻いた鋭い目つきの女性が人差し指を口に当てて一言、「おしゃべりするな！」といふものある。

まつたくその通りだ、おしゃべりしたら矯正収容所への片道切符を渡されちまう。

そんなことを考えながら歩いていると艦橋についた。あちこちでビビが目立つ。艦長のアントン・ヨシフォヴィチ・グーリン中佐も心配そうに天井のビビを撫でていた。聳え立つような大男であるグーリン中佐は「こいつもかわいそうなヤツだ」とボヤくとウリリフに向き直った。

「おお、ミーシャ。今日は出撃の予定は無いぞ」

「は、それは分かつております」

かしこまつて答えた彼をグーリン中佐は笑い飛ばした。

「はつは、犬はいなからゆつくり休んでおけ」

「犬？」

不審そうに尋ねた彼にグーリン中佐はそもそも当然と言つようつに吐き捨てた。

「戦っている俺らの一挙一同を何もせずに見張つてる犬さ」

艦橋にいた十五人ほどの幹部達がどつと笑つた。

ウリリフの不幸なところはここである。同居人（人では無いし常人に感知できない存在だとは言え）が反政府的言動を連発する、艦長に気にいられているのは良いがこの人も危険なことをよく口走る。「ヤツらがまともな共産主義者なわけがないぞ。俺の方がヤツらよかよっぽど共産主義のことを勉強しているぞ」

僅かな救いと言えば彼は紛うこと無き共産主義者であるところだつた。ただそれだけと言えばそれだけで、あまり救いにはならないが。

「艦長、うちのミーシャをいじめんください。こいつあ人一倍気が弱いんですよ、なあ？」

航海長イワーン・ヴィクトロヴィチ・ワシリエフ大尉が安タバコを咥えた口に苦笑いを浮かべて海図から顔を上げた。彼がウリリフの上司である。何となく往年の白軍もかくやといった雰囲気になつた

艦橋に折しも主計長が昼食のシチーを持ち込んだ。帝国時代からの慣例、艦長による味見の時間である。

グーリン中佐はシチーを啜ると顔をしかめた。

「ワロージャ、もうちょっと塩を効かせて、あとベーコンとか具も入れてやれ。こんなもんじや俺が『リコフ大佐（戦艦ポチョムキンの艦長だったが有名な反乱の際に殺された）になつちまう』

「しかしですね、食料品もほとんど無いんですよ」

「ならワロージャ、犬の食いもんの質を落としてやれ。ヤツがベーコンたつぶりのシチーを食つてるのは俺だって知つているんだぞ」「む、無理ですよ艦長。そんなことしたら私が懲罰大隊送りになつてしまります！」

慌てふためいている主計長にグーリン中佐は仕方ないという表情をした。

軽巡『トリニダード』の倉庫にその艦魂はいた。やつれた様子で安樂椅子に揺られている。グリーチヤはと囁つと壁に背中からもたれかかり煙草をふかしていた。

「トリニダード中尉殿、本日の天候から見るとドイツ軍の爆撃が行われる確率は非常に高いものと考えられる。よつてその用意はしておくようお願いする」

短くなつた煙草を左手に持つた灰皿に押し付けながらグリーチヤは、自分はどうもつけんどんな物言いになつてしまふなと考えていた。一方のトリニダードは怯えたよつた表情を見せていたが、ドイツ軍による爆撃の可能性かそれとも前にいる「マルマンスクの氷女」の風貌に怯えていたのか、どちらなのかは分からぬ。あるいは両方だったのか。

「あ、あのー、グレミヤーシチイ大佐

「グリーチヤで良い。本来なら貴官の方が階級は上だ」

「じゃあグ、グリーチャさん」

「この後しばし逡巡してから意を決したように咳払いをした。

「実際の共産主義ってどうなんですか？」

予想だにしていなかつた問いかけにグリーチャはたじろいだ。左目
の視線が宙を泳ぐ。

「……な、何故そんなことを？」

ようやく左目で見据えるが、相手の澄んだ青い瞳に見つめ返され
て視線を外す。

ソ連の体制は話に聞くロシア帝国の社会体制を首だけ挿げ替えて
社会主義と言う名前に変えただけのものと感じられるのだが、どう
も余所では「共産党が指導する貧富の差が無い理想社会」として伝
えられているらしい。

そういう感覚を一度ならず覚えていた彼女はとりあえず相手の話
に合わせておこつと決心していた。

別に相手に実害は無いし、なによりも夢を壊さずにする。それに
「敵たるナチスとあまり変わらない全体主義国家を支援しに行く」
よりは「残酷なナチスにやられて崩壊寸前の理想国家を支援しに行
く」方がトリニダードのような援ソ船団の護衛達には嬉しいであろ
う。実質は前者であつても、後者だと思い込んでいればやりがいが
ある仕事だということに変わりはない。

フィンランドがナチスと共闘したのも幸運で、実際はソ連が悪く
ても連合国の中ではフィンランドに対する同情心が薄れていた。一
方のソ連は自らの悪行が帳消しになり、逆に「ドイツとフィンラン
ドに悲惨な目に遭わされているかわいそうな国」扱いである。

グリーチャの姉である「ヴォルコヴォイ」ことゴルダイは「憐れ
んでやれ、リュティ（フィンランドの大統領）はカレリアを『心の
故郷』認定して墓穴を掘りよつた」と言つたがグリーチャもそれには全面的に同意であつた。

「もちろん悪い事をすれば逮捕されるし、トウハチエフスキーやヤキール達は悪い連中だつたから逮捕されて死刑になつたわけだ」

悪い事をしてなくともな、と言いたかつたが余所者に言うわけにはいかない。いくら不満があるとは言え彼女とてロシア生まれであり、生まれた地の恥となるような事を漏らすわけにはいかなかつた。だが、妙に疑り深い視線を向けてくる相手に彼女は窮した。

「無能な貴族様が士官をやつて日本にボロ負けした頃に比べれば、つと良いつて生き残りは言うんだ」

彼女の生まれ故郷であるレーニングラードには日露戦争に参加して「ツシマの惨劇」を生き残り、ついには革命の元勲となつた防護巡洋艦『アヴローラ』の艦魂が「嘆きの女神」とのあだなで呼ばれていたり、帝国時代からの生き残りである三隻の戦艦の艦魂がヤケ酒の飲みすぎでアル中になつてたりと、彼女の言葉が嘘であることの証拠なら沢山あつた。しかしそんなことを言つわけにもいかず苦い笑みを浮かべながらソ連の素晴らしさを力説する。

それでもやはり疑いを解く事は出来ず、逆にスペイン内戦のルポで後にスター・リーニズム批判の嚆矢になつたオーウェルの『カタロニア讃歌』などを持ち出して来た相手に苦戦し、最後は「いづれ歴史がソビエトを判断するだろう」と苦し紛れの結論で質問を強制終了する羽目となつた。

だが彼女にも聞きたい事は多い。成り行きで指揮官にされたとは言え相応の責任は伴うので情勢判断の材料は多い方が良い。そのことに関する質問だがそれこそがこの会見の本題であり、トリー・ダードもすぐに答えてくれた。

「地中海ではマルタ島を巡つて我々とイタリア海軍が交戦中なのは御存じでしょうが、どうもドイツ空軍の援護が強力らしく戦況は芳しくありません。その上、太平洋では日本がなぜか無敵の快進撃を続けておりまして……それにしても昔は一大海上帝国を築いたオランダが本国どころか植民地まで消滅したりと歴史は残酷です。クラ

ウツ（ドイツ人）も相変わらず懲りてないし、イタリア人も調子に乗るのでろくなことありませんね」

「ぼやき節を始めた相手にグリー・チャは相槌を打った。

「その通り。歴史なんて口クなもんじやない。それで他には

「あつ、あ、すいませんつ。そ、そしてここ、北海方面ですが良くないニコースです。巡洋戦艦『シャルンホルスト』および重巡洋艦『アドミラル・ヒッパー』『プリンツ・オイゲン』、ポケット戦艦『リュシツオウ』『アドミラル・シェーア』がノルウェー方面に進出したことが確認されました。前に進出した『テイルピツツ』もあわせればドイツ海軍の水上戦闘部隊の総力と言つても良いでしょう。慰めとしてはアドミラル・ヒッパー級重巡洋艦のうち一隻が我が方の潜水艦の雷撃で損傷していることですが」

「……だが、ヒッパー級が一隻本国に戻つても『グナイゼナウ』が修理完了次第こちらに來るのは？」

「……そう言つことですね」

眉をひそめながらグリー・チャはライターをカチカチと言わせて煙草に火をつけた。トリー・ダードもサイドテーブルに置いてあつた水で喉を湿らせた。

二人は押し黙つたまま考え方をしていた。

グリー・チャは一本吸い終わると、灰皿にぐりぐりと押し付けた。

「そう言えど、イタリアにも駆逐艦はいるだろうが、どんな感じだ

？」

「……イタリアの駆逐艦、ですか？　あー、地中海艦隊からの報告では『足だけは速いので手こずるがそれ以外はどうということも無い。航洋性が低いらしくちょっとした嵐でも沈むよつだ』とのことでしたが、それがどうかなさいましたか？」

不審そうに尋ねるトリー・ダードに彼女は乾いた笑い声を上げた。穏やかな地中海におけるちょっととした嵐で沈む駆逐艦の親戚のよんなものである自分がこんな常時大嵐の荒海を職場にしていると分かれば笑うしか他は無い。

わりあい呑気な早朝が過ぎていくがルフトヴァッフェ（ドイツ空軍）が損傷して動けないイギリスの軽巡洋艦という大物を見逃してくれるわけもなかつた。

第二話・明るい空、黒い影（後書き）

あとがき

ちょっとした悩みですが、地の文で人名を表記した時、どうしたら分かり良いですか？

例えばウリリフと書くか、ミーシャと書くか。グレミヤーシチイと書くかグリー・チャと書くか。

私がらすると会話文での呼び名と地の文での表記を一致させた方が良いかとも考へていろいろですが……。

ご意見お待ちしております。

解説

矯正収容所

ラーゲリとして知られる。罪人を「矯正」するのが建前なので「矯正収容所」なのだが実態が実態なので一般的には「強制収容所」と訳される。ただしラーゲリには本来「キャンプ」ぐらいの意味しかない。もちろん政治犯から刑事犯まであらゆる罪人や捕虜までをぶち込んで強制労働させる施設なのが。

実態は実際にぶち込まれていたことのあるソルジエーツィンの著作に詳しい。しかし場所によつてはこここの内部の方が言論の自由があつたとも言われる。スターリン批判も自由だつたり子作りできたりと結構フリーダムなところもあつた。

有名どころでは極寒のシベリアで金山掘りをさせられるために余命が三週間にまで縮むコルイマ収容所など。

懲罰大隊

軍法を犯した者でも軽度な者はラーゲリではなくここに送られる。ここで戦いながら刑期を過ごすが、戦車跨乗兵タンクデサントにされたり、シートルモヴィクで後部機銃手（その席のみ都合により無装甲）を勤めさ

せられたり、主力部隊に先んじて地雷原を歩かせられたりと過酷なのでほとんどが生きてお勤めを終えることはない。ちなみに大佐でも容赦なくタンクデサントをさせられたりする。

ケチなことをして懲罰大隊送りになるよりラーゲリ送りの方が良い場合もある。ただ、コルイマに送られることを考えるとお勧めできない。真っ当にソ連軍で上官の言うことを素直に聞いて祖国防衛の為に働く！ さあ、ファシストのエヴ号戦車に小銃で突撃する作業に戻るんだ！

トウハチエフスキー

ミハイル・ニコラエヴィチ・トウハチエフスキー。

もとはロシア帝国軍の将校だったソ連軍元帥。没落貴族の生まれ。赤軍の司令官として活躍し、縦深戦術の考案、空挺軍の設立、ロケット開発、機甲部隊の整備などに功績を残す。諸外国から「赤いナポレオン」「赤軍の至宝」との異名を与えられたが肅清された。ちなみに作曲家のショスタコーヴィチとは親友で、フランス大統領となつたド・ゴールとは捕虜収容所仲間。

彼が殺された一方、ブジヨンヌイのような老害が生き残つたりするから困る。

ヤキール

イオナ・エマヌイロヴィチ・ヤキール。

ソ連軍元帥。トウハチエフスキーの仲間として活動していたが肅清された。Wikie見りや分かるように物凄くかわいそうな人。ただそこまで有能では無かつたらしい。

トロニダード

艦級：クラウン・コロニー級軽巡洋艦？ フィジー・グループ

排水量：8,520t

全長：169.3m

全幅 : 18.9 m

速力 : 33ノット

武装

Mark? XXIII? 15.2 cm? 3連装砲? x? 4

Marks? XVI? 10.2 cm連装高角砲? x? 4

ポンポン砲? x? 4

エリコンFF? 20 mm連装機関砲? x? 6

12.7 mm? 4連装機銃? x? 4

533 mm 3連装魚雷発射管? x? 2

装甲

舷側 : ? 83 mm

甲板 : ? 51 mm

航続距離 : 15ノットで7,400海里

艦載機 : スーパーマリン? ウォーラス水上偵察機? x? 2

*解説

1941年3月21日、デヴォンポート造船所にて進水。イギリス本国艦隊の所属でソ連向け船団の護衛に従事した。

艦級としては第二次ロンドン海軍軍縮条約の範囲内で建造されている、平凡な軽巡洋艦。

*艦魂

実は共産主義者だが、偶然オーウェルの書いたスペイン内戦のルポタージュである『カタロニア讃歌』を手に入れたためソ連に少し疑念を抱いている。

Pe - 3

乗員 : 2名

全長 : 12.66 m

翼幅 : 17.13 m

発動機 : クリモフM-105RA? x? 2

出力 : 1,110 hp

空虚重量：5,858kg

最大速度：530km/h

航続距離：1,500km

武装

ShVAK? 20mm機関砲? ×? 1

UB? 12.7mm機銃? ×? 3

ShKAS? 7.62mm機銃? ×? 1

爆弾 700kgまで

ペトリヤコフ技師の開発した双発重戦闘機。

もとは「ソ連版モスキート」とも呼ばれる急降下爆撃機Pe-2。だがそのもとをたどれば高度10,000mで630km/hと言う記録を出した試作高々度戦闘機VI-100なので、ある意味では先祖帰りした機体。ただ、与圧キャビンと過給器が信頼性に欠けた上に、仮想敵国の日独に高々度爆撃機が存在しないため不要とされたそれらの装備は外されている。「ソ連版モスキート」から発展した機体とは言え主翼などは金属製。このシリーズは生産性が悪かつたため需要の多かつたPe-2が重点的に生産され、Pe-3は少量生産に留まった。

優れた性能を誇ったがPe-2ゆずりの操縦の難しさからそこまで好評ではなかつた模様。当のペトリヤコフ技師もPe-2に乗つていて事故死した。

スペックはPe-3bis。

Yak-1

乗員：1名

全長：8.48m

翼幅：10.00m

発動機：クリモフM-105PF

出力：1,180hp

空虚重量：2,394kg

最大速度：592km/h

航続距離：700km

武装

ShVAK? 20mm機関砲? ×? 1

UB? 12.7mm機銃? ×? 1

ヤコブレフ技師の開発した単発戦闘機。朝鮮戦争初期まではソ連の戦闘機と言えば「ヤク戦闘機」と言つのが西側の共通認識だったがその基盤となつた戦闘機。のちに改良を重ねられYak-9やYak-3と言つた名機を生み出した。

機体構造は鋼管羽布張りや合板製部分もあつたりと旧式。ただしウクライナなどの重工業の中心地を押さえられたソ連では金属が不足していたのであえてこの構造を取らねばならなかつたし、副次的ながら家具工場でも機体が製造できるという利点があつた。にも関わらず液冷エンジンを搭載したおかげで見るからにスマートな最新鋭戦闘機と言つた風貌となつてゐる。あだなも「美男子」。

使用された合板の「デルタ合板」は耐火性、防弾性に優れていたが非常に重かつたため小型にも関わらずかなり重たい機体だが、優れた空力学的設計と大馬力エンジンのおかげで高速かつ武装も当時としては強力。ただ航続距離が短いので護衛任務には向かない。それでも迎撃戦には大活躍で有名どころでは「スターリングラードの白百合」ことリディヤ・リトヴァークなどエースを多数輩出した。

ただ、このころのソ連機には共通だが工場の疎開（一週間でウクライナからウラル山脈の東にまで疎開した工場もあるほど急激であった）などの影響で品質が一定せず、カタログスペックに達することは珍しい。

スペックはYak-1B。

乗員：1名

全長：8.90m

翼幅：9.80m

発動機：クリモフM-105PF

出力：1,180hp

空虚重量：約2,300kg

最大速度：560km/h

航続距離：650km

武装

ShVAK? 20mm機関砲？×?1

UB? 12.7mm機銃？×?2

RS-82口ケット弾？×?6?または爆弾300kgまで

ラボーチキン技師、ゴルブノフ技師、グドコフ技師の三人が設計した単発戦闘機。

やはり機体構造のほとんどがテルタ合板。わりあい頑丈で被弾にも強いが一旦壊れるとたちまち空中分解する。しかもエンジンが機体の性能に比するとアンダーパワーなせいで全体的に性能が低い。そこで対地攻撃が主任務とされたが、さらにはエンジン自体が品質の問題で性能がまちまちなためひどい物になると飛ぶのもやつとという有様。1型から66型まで、66の派生型が存在しており終戦まで配備されていた。

それにしてあんまりなのでバイロットからは「塗装された完璧な棺桶（ロシア語で表記して頭文字をとるとLaGGとなる）」の蔑称を頂いてしまった。

同世代の主力戦闘機の中でも最低性能の本機だが後に空冷エンジンに換装など大幅な改設計が行われ名機La-5に生まれ変わる。スペックはLaGG-3?35型。

乗員：1名

全長：9.19m

翼幅：10.36m

発動機：アリソンV1710-67

出力：1,200hp

空虚重量：約2,300kg

最大速度：621km/h

航続距離：1,040km

武装

T4? 37mm機関砲？×?1

12.7mm機銃？×?2

RS-82ロケット弾？×?6? または爆弾300kgまで

米ベル・エアクラフト社開発の単発戦闘機。運動性を良くする為にエンジンを胴体の重心附近に収容、プロペラシャフト内部にあらゆる航空機を葬る極めて強力な37mm機関砲を装備、無敵の戦闘機になる予定だったが液冷のアリソンエンジンがボロすぎて一番多い中高度での空中戦で日独の戦闘機にフルボッコ、米英では極めて不評だった。

しかしレンドリースでこれを手に入れたソ連においては本機が得意とする低高度での空中戦が多発した為大活躍。対地攻撃にも活躍しドイツ軍陣地に自慢の37mm機関砲弾を雨霰と降り注がせた。ちなみに報われない後継機P-63キングコブラもいるが、やっぱりソ連では大人気。

スペックはP-39M。

I1-2

乗員：2名

全長：11.60m

翼幅：14.60m

発動機：ミクーリンAM-38F

出力：1,720hp

空虚重量：4,360kg

最大速度：414km/h

航続距離：720km

武装

VYa-23? 23mm機関砲？×? 1

UB? 12.7mm機銃？×? 1

ShKAS? 7.62mm機銃？×? 2

RS-82? ×? 6口ケット弾？またはRS-132×? 4口

ケット弾？または爆弾600kgまで

イリューシン技師が開発した単発の**襲撃機**。重武装を誇り地上攻撃に活躍した。装甲も頑丈でなかなか撃墜できず（それでも鈍重な

本機の損害は大きかつたが）ドイツ空軍には「空飛ぶベトンブンカー」と厄介がられ、ドイツ陸軍には「黒死病」「黒い死神」と恐れられた。ただし後部機銃席のみ重量の問題で装甲が無きに等しいため、機体は無傷でも機銃手が蜂の巣になつてているなど日常茶飯事。そのためその席はタンクデサントとともに懲罰大隊の主要な送り先の一つに。

一応対空戦闘が出来ないこともないが、運動性が悪いのでやらないほうが賢明。もともとそんな用途に使う物でも無いし。ただし戦闘機型が試作されたこともある。

スター・リン曰く「赤軍はパンや空氣と同じく本機を必要としている」。なんだかんだ言って彼の方が超兵器マニアの伍長よりは現実が見えていたw

スター・リンの猛烈な後押しのおかげで総生産数は軍用機で史上最大の36,163機を記録した。派生型も多い。スペックはI1-2M3。

JU88

乗員：4名

全長：14.40m

翼幅：20.00m

発動機：ユンカース? ユモ211J-1 × 2

出力：1,350hp

空虚重量：不明

最大速度：510km/h

航続距離：2,430km

武装

MG81?7.92mm機銃? × 5

爆弾3000kgまで

ユンカース社が開発した独軍の高速双発爆撃機。水平爆撃、緩降下爆撃、雷撃となんでもこなせる名機。性能的にもそこそこだが「高速爆撃機」の常で速度も作戦高度も満足できる物ではなかった。夜間戦闘機に改造されたりとドイツ機には常だが派生型が異常に多い。

スペックはJU88A-4

第四話・不吉な鴉の羽音が（前書き）

前話でムルマンスクの防空を担つてているのは貧弱な第九五戦闘連隊しかいないと書いてしまいましたが、よく考えるとエースパイロット集団の親衛第二戦闘連隊がありました。
誤った内容を書いてしまい誠に申し訳ないです。

第四話・不吉な鶴の羽音が

四月二日。

ムルマンスクに日の光が差す。崩れ去つた家々、穴だらけの道路、真つ二つに引きちぎられた自動車の残骸。高射砲の黒光りする砲身が瓦礫の中から空を覗き、半分崩れかけた建物の屋上には高射機関砲が据え付けられている。

搔き分けられた瓦礫の間を道が通り、ペーペーシャことPPSh-41短機関銃を背負つた歩兵の一団を満載したゴーリキー自動車工場製のトラックGAZ-MMの隊列やら高級将校を乗せたフォード製のジープやらが走つていた。

焼け残つっている酒場ではソ連人はもちろん、イギリス人やアメリカ人も酒を飲んでいた。喚き声やコップや食器の触れ合ひの音が煉瓦の壁に反射し、酒場を覆う。

国民の士気を鼓舞するためこの独ソ戦は『大祖国戦争』と名付けられ、またソ連指導部は民族意識を「唾棄すべきもの」と位置づけたこれまでの政策を放棄し、帝政時代に作詞された軍歌なども解禁された。海軍でも帝政時代の終わりとともに絶えていた「親衛称号」を復活させた。景気の良い話を多く作り上げて士気を高めようとしたソ連海軍首脳部はささいな武勳にもその称号を与えたため、しまいにはかつての優雅な面影を完全に失つていた、元はニコライ一世一家が大の寵兒にしていた帝室ヨット『スタンダール』である敷設艦『マルティ』にまで親衛称号が授与されることになった。四二年には今までのソ連式の制服がロシア帝国軍が採用していたものに類似したギムナスチョルカ風のものへと変わることとなる。

ムルマンスクにいる海軍将兵の間でちょっとした人気になつてゐる歌が『ヴァリヤーグ』であった。日露戦争で勝ち目のない戦いに

赴き、英雄的な最期を遂げたとされる防護巡洋艦を讃えたこの歌は自分たちの境遇とも重なるのか。さらに言えば防護巡洋艦『ヴァリヤーグ』は辺鄙へんびな造成中の港町だつた頃のマルマンスクに配備されていたこともあり、それが彼らに親しみを持たせた。

ただ、この歌は三番が抜けていた。「黄色い顔の鬼畜�どもが待ち受ける」などと歌つた三番は日露戦争後に結ばれた日本とロシアの同盟に悪影響を及ぼさないようにとロシア帝国が削除してしまったので、誰も覚えていなかつたのだ。歌つている方にしても「黄色い顔の鬼畜�ども」と戦つているわけではないのでおおかたの意見は「三番がなくともどうでもいいや」とのことであつた。

ちなみにこの歌はドイツ人が作詞した歌である。敵国人の作った歌だが政治将校達にしても指揮を鼓舞するのにちょうど良い歌なのでうるさいことは言わない。

したたか酔つぱらつた士官が歌い始めると周りからも同調者が現れ、最後には大合唱となつてしまつた。酒場の隅で鋭い視線を外国人たちに投げ掛けていた政治将校達も大声で歌い始める。

?

!

?

同志達よ上甲板へ、総員戦闘配置につけ！

最後の觀艦式は始まれり

我らの誇り高き『ヴァリヤーグ』は敵に降伏などせぬ

誰も慈悲など求めはせぬ

全ての軍艦旗は翻り、鎖は音を立て
錨は巻き上げられり
備砲は配置につき
明るき陽光で不吉に光る

?

?

風切り音と爆音に包まれ
砲声は轟き弾丸は叫ぶ
恐れを知らぬ誇り高き『ヴァーリヤーグ』は
もはや地獄と化していた

死の苦しみに船体は震え
轟く砲声、悲鳴と呻き声
艦は炎に包まれて

別れの時はそこに来たれり

!

さらば同志達よ！ 幸運を、万歳！
眼下の海は沸き立つ
考えだにせず、昨日共にいた朋友が
水面の下で死ぬるとは

?

!

?
!

語るべき石や十字架も無く

誇り高きロシアの旗のため

ただ海の波だけが永遠に讃える

『ヴァリヤーグ』の英雄的な最期を！

歌い終えると外国人の塊からも拍手がわいた。何人かの酔っぱらつた士官らしき人物達が立ち上がり、ウォッカの入ったグラスを片手によろめきながら近づく。

「はらしょー！ おーちん、はらしょー！」

たどたどしいロシア語の叫びをあげると「盟邦ソ連の勝利を祈つて乾杯！ 一杯奢らせてください」と口々に言い、ソ連の士官達に酒を奢り始めた。しかし、突然不吉なサイレンが鳴り響いた。

「ファシストどもめ！」

酔っぱらつた士官が喚くや、ソ連兵達は蜘蛛の子を散らしたように戸口に殺到し外へと駆けていった。

ムルマンスク港に停泊する艦隊にも報告が伝わっていた。

「監視所からの報告です！ 敵はJu88およびBf109、Bf110、その数計約四十！」

無電室からの報告に駆逐艦『グレニャーシチイ』の艦長グーリン中佐は舌打ちをした。

「ふん、ファシストめ。性懲りも無く来やがったな。総員戦闘配置につけ」

艦長の下命で艦内の動きが慌ただしくなった。スピーカーが狂つたように喚き立て、甲板では砲弾を山積みにした台車が走り回る。主砲や高射砲が空を睨んでいた。

航海士のウリリフは艦橋にいるがこの駆逐艦が動けないのであん

まりやることがない。そもそも、狭い港の中で回避運動なんかをしたらことである。航海長のワシリエフ大尉は酒場から急いで帰ってきたがへべれけだ。砲術士官達は忙しそうにでかでかと「機密」と書かれた本やら紙やらを引っ張り出していた。よくは分からぬがややこしいらしい。

「ソコーリヌイ・ウダール（隼の一撃）だ。それを忘れるな。それと敵は戦闘機ではなく爆撃機だぞ。戦闘機なんぞ無視しちまえ！」

第九五戦闘連隊の今日の出撃で指揮を任せられたポリフェモフ中尉の命令に無線機からは酷い雜音混じりの「はい！」という威勢の良い声が聞こえてくる。先頭を飛ぶのは中尉が操るI1-2。乗機が示すように、元が対地攻撃専門のシユトルモヴィク乗りの彼には空戦に関する知識などほとんど無いのだが、万事システムを尊ぶソ連においては素人でもすぐにある程度の戦いをこなせるような戦い方を授けてくれる。

I1-2やP-39、ハリケーンが混ざつたむちやくちやな編成の編隊はゆるゆると上昇して行き地面を俯瞰する。鈍重なI1-2は遅れがちで喘ぐように上昇した。

見るからにスマートなBf109や獰猛なスタイルのBf110が爆撃編隊を先導する。眼下に半ば灰燼と化したマルマンスクの町並みが広がっている。フィンランドとの国境にほど近いペチエンガから出撃したドイツ空軍の第五戦闘航空団第一飛行隊が爆撃機の護衛に付いていた。

「蚊^{かとね}蜻蛉^蛉どもは我らに任せ、貴官^{おほひ}はお心して爆撃に専念してくれ給え」

隊長のギュンター・シュルツ大尉は無線でそう伝えるとスロット

ルを開いて上昇し、単調なプロペラの音を響かせつつ敵を探した。

わらわらとてんでばらばらに第九五戦闘連隊の航空機は爆撃編隊に飛びかかった。爆撃機を護衛していた第五戦闘航空団第一飛行隊の面々は一機一組のロット戦法を崩さず突撃する。

たちまち曳光弾の光が飛び交う。数機のI-16やハリケーンがたちまち火達磨となつた。

ポリフェモフは獲物を探していた。

「ヒー、一匹やつつけたぞ！」

無線から聞こえるこの雜音の酷い声はフヨーデル・ミハイロヴィチ・レスネット少尉の声だつた。彼はウクライナで飛行機からの農薬散布を生業なりわいとして歩んできたが戦争の勃発で戦闘機のパイロットとなつ人物である。彼はいわゆる変人で、旧式と見なされているI-16を巧みに操つて戦果を順調に伸ばしていた。上官達は彼の戦果だけを見てもっと良い新型機に乗るよう勧めているのだが、彼の戦法は小回りが利くI-16でないと駄目らしい。

レスネット少尉機を見ると次の獲物に飛びかかるべく急降下していだ。獲物はBf109。どうやら新参のパイロットらしく頑丈なI-16に機銃を浴びせるのに夢中で上から襲いかかるI-16に気付かず、ほとんど真っすぐに飛んでいた。

「おいおい、狙うのは爆撃機だぞ……まあいいか」
ポリフェモフは一人ごちる。

マクシミリアン・フォン・ローゼンベルクは前を飛ぶ『空飛ぶべトンブンカー』に機銃弾をあらかた撃ち込んでしまつていた。

「クソッ！ 何故落ちない！」

I-16は必死の回避運動もむなしく多数の機銃を撃ち込まれ後部機銃も既に沈黙しているのだが煙さえ出さず、まだ平然と飛んでいる。彼は残弾が僅かなことを理解していた。本当はしたくなかった

たのだが、ロックピットに機銃を撃ち込むことにした。いくら頑丈でもパイロットが死んでしまえば意味は無い。

彼は前のE 1 - 2に対し十分に上へ行くと機首を下げた。ふらふらと動く相手の操縦席に機銃の狙いをつけるのは難しい。スロットルを絞り、ゆっくり腰を据えて狙いをつけようとした。

殺氣。彼はギョツとして振り向く。真後ろにE - 16がいた。機体のすぐ上を機銃弾がかすめる。叫びつつ急いでスロットルを開いたが時既に遅し。

「助けて！」

レスネット少尉はE - 16の足を片方だけ出したまま飛んでいた。よく見ると一方の足はへし折られたのか妙なところでちぎれている。勢いをつけて降下した彼はそのままフォン・ローゼンベルクのBf 109の垂直尾翼に足をうまくぶつけた。いやな音がエンジンの轟音とともに鳴り響き、垂直尾翼と足が同時にへし折れる。

「足のお味はいかが、ネーメツ（ドイツ人の蔑称）め！」

ロシア空軍伝統の技、タラーンは敵機に体当たりするといふ技であつた。世界で初めて敵機を撃墜したロシア帝国空軍のパイロットもこのタラーンを行つて敵機もろとも落ちていつたのだ。しかし、意外や意外、手練れが行つた場合は生還率も高い。

タラーンで五機以上の敵機を撃墜してエースパイロットになつた者もかなりの数があり、自軍の航空機の性能が敵に比して劣つていてことを理解していたソ連空軍も始めは推奨していた。後にドイツ機と同等の戦闘機が登場したにも関わらず、性懲りも無く体当たりを繰り返し、せつかくの新鋭機を次々に破壊してしまったのが非常に多かつたので結局は禁止されることとなつてしまつたが。

両足の折れたE - 16が去つていつた後にはきりもみしながら落ちていくBf 109があつた。そして落下傘が一つ、空中で頼りなげに浮かんでいる。

ポリフェモフ中尉は一やりとそれを見た。パラショートにぶら下がっている相手？？生きている限りソ連の空を侵し、仲間達を苦しめるに違いない？？を擊つてみたくなつたがそれを抑え、下を飛ぶスツーカを確認すると「ソコーリヌイ・ウダール！」と一声叫び操縦桿をぐつと前に押し倒した。

中尉のE-1-2はスツーカに食らいつくべくけたたましい風切り音と共に急降下。二十三ミリ機関砲が火を吹き、火線は機体を傾けて逃げようとしたそれの胴体にミシン目を開けた。その威力は凄まじく一刀両断されたスツーカはたちまち墜ちて行く。無線から響いていた雑音混じりの悲鳴はぶつつと途切れた。

「さまあみろ！」

中尉は機体を起こしながら叫ぶ。水平飛行に移つたのを計器で確認してからもろ手を挙げて喜びを表現したが、背後から聞こえた激しい乱射音に気付き操縦桿を握り直した。慌てて旋回するとその機体の真下を猛スピードでBf109が飛んでいった。あつという間の出来事に反応できなかつた中尉は何事かと辺りを見回す。後部座席の射撃音は止んでいた。が、下をすり抜けざまにエンジン下部にあるオイルクーラーを撃ち抜かれていたらしい。たちまちプロペラの回転は弱まり、黒い煙が前方を覆う。

中尉は煙の切れ目から眼下に広がる草原を見つけると不時着を試みた。どんどん濃くなつていく煙、そして燃料に火がついたらしく足下が熱くなつてきた。煙の切れ目から一瞬だけ地面が見え、その記憶を頼りに降下する。

頭に強い衝撃。彼は意識を手放してしまつた。

既にこの第五戦闘航空団でも有数のエクスバルテンであるハインリヒ・エールラーは怒り心頭だつた。彼は僚機を失つたローゼンベルクの機体をちらりと目にはしていたが自分の獲物を追うのに夢中でつい見過ごしてしまつたのである。

「グスタフ、ついてこい！」

彼が狙うは前方で両足の折れたI-16。片足がぶらぶらとワイヤー一本でぶら下がっていた。彼はスロットルを全開にしてI-16に追いつく。相手の腕は良いらしくさつきのI-1-2のようになつて易に後ろを取らせてはくれない。それに如何に旧式とは言えI-16は小回りの利く危険な相手であった。彼は一度、一本の木立の上でぐるりと一回旋回したのを見たことがある。水平運動をやらせればまるで曲芸飛行としか言い様が無い動きを出来るのがI-16と言つ敵だった。

上下運動で優位に立つ一機のBf109にI-16は翻弄されたが、それでもエールラーが射線に捉えたかと思うと瞬時に機体を横滑りさせて逃れる。グスタフ・レルヒの乗る僚機が後ろにつくがスロットルを絞ったのか急減速し、レルヒの後ろにつく。レルヒはなかなか機銃を撃たせない。が、何度も繰り返していると要領がハツキリと掴めた。わざと水平旋回を挑むとI-16は見事後ろに食らいついた。その早業に彼は頭の片隅で舌を巻いた。相手に考えさせる暇を与えず彼はスロットルを全開にして急上昇。焦つたI-16は追おうとして機首を上げた。グスタフの機体が機銃を放つ。I-16の主翼がもげ、機体は落ちていった。白い落下傘が開く。

第九五戦闘連隊が戦闘機に手間取つてゐるうちにドイツの爆撃機編隊は僅かな損害だけでどうにか切り抜け、少數の護衛を引き連れてマルマンスクへと一直線に向かっていく。が、その行く手から新手の機影がやってきた。

P-39に乗るアンドレイ・イワノヴィチ・ボルコフ曹長はBf109と旋回戦を演じていた。

「離れる！ こっち来んな！」

喚けど叫べど一機のBf109は入れ替わり立ち替わり攻撃を仕

掛けてくる。一機を追うとその僚機が横から攻撃を仕掛けてくる。

軽い音がして風防に穴が空いた。冷たい風が操縦席に吹き込む。手がかじかみ始める。彼は目をかっと見開き、懸命にこらえつつ旋回を続けた。後ろに敵がつく。スロットルを開き急上昇、次いで急降下。胃液が口から漏れる。

突然無線が声を発した。

「私は親衛第一戦闘連隊司令官、ボリス・サフォーノフだ。遅れて申し訳ない。今から攻撃に入る。ようし、者共、行け！」

第四話・不吉な鴉の羽音が（後書き）

ソ連のエースパイロット

一般的に数頼みの雑魚集団とのイメージが強いソ連空軍ですが結構個性的なパイロットが多いのが特徴です。たとえば個人戦果62、協同戦果0のある意味驚異的な記録を持つ「連合軍最強のエース」コジエドウーブや1941年の空を旧式きわまるI-16で飛び回りエースになつたサフォーノフ、1回の出撃で5機を撃墜した「即日エース」グリヤーエフ、タラーン・エースの一人であるコブザン、「義足のエース」ソローキン、卓越した技術と統率能力で合計戦果が連合軍第四位のエースとなるモルーデルに撃墜されたシェスタコフなどドイツのエクスパルテン顔負けの連中がうじやうじやいます。もちリディア・リトヴァークみたいな女性エースがいるのはソ連空軍だけ。

本作では「ムルマンスクの星」とことサフォーノフが指揮しソローキンなどが所属する親衛第二戦闘連隊と「極北のエース」エールラーやワイセンベルガーの所属するII・/JG 5およびIII・/JG 5の戦いも書く予定。

Bf 109 E

乗員：1名

全長：8.80m

翼幅：9.90m

発動機：ダイムラー・ベンツDB 601 A

出力：1,100hp

空虚重量：2,053kg

最大速度：555km/h

航続距離：655km

武装

M G F F 20mm機関砲 × 1

M G 17 7.92mm機銃 × 4

爆弾500kgまで

バイエルン航空機製造株式会社のルッサー技師が開発したドイツの主力戦闘機。設計主任はルッサーにも関わらず、メッサーシュミットと言えばこれを差すというほど有名。E型は大戦初期の主力機として有名。1942年中ごろまで北方戦線にはBf109Eしかおらず、Bf109Fが現れるのはそれまで待たねばならなかつた。生産数は軍用機史上一位の三万機以上。I1-2に次ぐ。弱点としては足が弱く、着陸時などに折れやすいことと、航続距離が短いこと。

スペックはBf109E-3。たぶん、ムルマンスクに飛来するJG5の装備は落下増槽を装備できるE-7かE-8だったものと思われる。

JU87 スツーカ

乗員：2名

全長：11.50m

翼幅：13.80m

発動機：ユンカース ユモ211J-1

出力：1,400hp

空虚重量：2,810kg

最大速度：410km/h

航続距離：1,500km

武装

M G 17 7.92mm機銃 × 3

3

爆弾 1 - 800 kg まで

ルーデルで有名なドイツの主力急降下爆撃機。スツーカは急降下爆撃機を示す Sturzkampfflugzeug の短縮形。防弾性能は貧弱で損害も多かったが、名機であることに間違いはない。

スペックは Ju 87 D - 1。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2695k/>

艦魂の歌 ??リバチー半島のかなた??

2011年1月7日06時54分発行